

二〇一五年七月一日

茶室へとあぢさゐの径辿りけり
相互ひ手話で語らふ端居かな
山清水ひく蹲踞に漱ぐ
うち揃ひ音符並びす梅雨きのこ

豆 狸
さつき
せいじ
菜々

二〇一五年七月九日

夏帽子枕辺におき子ら夢路
鍬置いて孫の差し出す麦茶受く
みささぎへ急礎つづく青葉闇
雲の峰へと機首立てて飛機離陸

司 郎
司 郎
菜々
宏 虎

二〇一五年七月八日

大輪の花と見紛ふ梅雨茸
霊峰の樹々直立す青葉闇
つばくらめ大河を低く掠め飛ぶ
特大の七夕竹や道の駅

なつき
せいじ
さつき
三 刀

二〇一五年七月七日

夏柳ベンチの吾にそよぎけり
萍のゆらりとせぬ鏡池
梅雨雲を分けゆく如く漁舟
館涼し龍馬直筆なる書簡
奔ける蓮の葉くぐる風のあり
健康が何よりの幸冷奴

さつき
豆 狸
司 郎
菜々
さつき
あさこ

会席の氷敷きなる刺身鉢

よし女

短冊をはみ出す文字や星祭

よう子

昏れなんとしてなほ白き花菖蒲

宏 虎

二〇一五年七月六日

昼寝覚め主婦であること忘れをり
長梅雨の憎しと畑睨みをり
風鈴を吊るす茶室の深庇

よし女
明日香
豆 狸

二〇一五年七月五日

濃紫陽花色とりどりに池塘染む
青竹の取り箸添へし夏料理
車窓いま青田平野となりにけり
満員のローカル線や山開き

あさこ
豆 狸
豆 狸
せいじ

二〇一五年七月四日

田植機の泥落とし行く里の道
初蝉と聞けど空耳かもしれず
案内図を団扇代はりに園巡る
雲の峰見よやポパイの力瘤
山門に入るや広ぐる蓮浄土
広芝の中に出現梅雨茸

豆 狸
ひかり
さつき
宏 虎
ぼんこ
豆 狸

毎日句会みのる選・二〇一五年七月二日